

ローマ字・英語の読み書き困難に対する RTI モデル支援（1）

—全体調査に基づく検討—

○小池敏英

佐々木健太郎

能田昂

銘苅実土

（尚絅学院大学学校教育学類）

（帝京大学教育学部）

KEY WORDS: 学習困難・英語・ローマ字

はじめに

1. 中学生英単語綴り習得困難の調査から指摘された課題

日本語を母語とする子どもにおける初期の英語の読み書き習得については、ローマ字の影響が指摘されている。銘苅(2018)は中学生 1326 名を対象に、英単語綴り習得と音素の混成スキル、英単語の流暢な視覚的認知、正書法の理解の関連を検討した。音素の混成スキルについては、ローマ字を用いて簡便に評価した。結果、中学 1 年生時点ではローマ字スキルが不全である場合、英単語綴り習得困難となるリスクが約 24 倍と最も高い値を示した。この背景としては、ローマ字はアルファベット文字が対応する音の理解や、音素を混成する操作の手がかりとなる可能性が挙げられた。更に銘苅(2018)は、英単語綴り困難者を対象に支援を行い、ローマ字の理解が不十分である場合、正書法の理解が困難であることを報告した。以上より、日本語を母語とする子どもに対する英語の読み書き指導については、まずローマ字を手がかりとして音素の混成スキルを身につけることが重要であると示唆された。

2. 小学校外国語教科化に伴う課題

2020 年度より小学校において外国語が教科となり、これまでは児童を英語嫌いにならないために避けられてきた読み書きの学習が導入されることとなった。これは、小学校における音声中心の外国語活動と、中学から本格的に始まる英語の読み書き学習のギャップの大きさから、英語に苦手意識を持ってしまう生徒の存在が課題として挙げられたためである。英単語の綴りは、綴りと発音が一致しないものも多く、日本語の読み書きよりも難易度が高いことが指摘されている。また、日本語の読み書きにつまずきを示す生徒は、英単語の綴りも重複して低成績である傾向が報告されており、小学校で英語の読み書き学習が導入された場合、多くの児童が困難を示す可能性がある。このため、児童にとって理解しやすい読み書き指導の導入方法について検討する必要がある。

しかし、学習指導要領解説や年間指導計画例を見ると、年間を通して「文字と音の認識を深める活動」を実施することは想定されているものの、小学校外国語においては文字の音の習得は必須の目標とはされていない(文部科学省)。多くの場合、同じ音素から始まる単語を複数聞かせるような活動が実施されていると考えられるが、このような活動によってどの程度音素の理解や混成スキルが身につくかは明らかでない。とはいえ、新しく始まったばかりの教科において、学習指導要領に掲げられている以上の内容を指導することは困難であると考えられる。

3. RTI モデルの支援の必要性

ローマ字の習得は、中学生において英単語綴り習得との強い関連が指摘されている。また、正書法の理解もまた、中学生の英単語綴り習得との強い関連が指摘された。これより、小学 5 年生と 6 年生を対象として、ローマ字の習得・定着を把握し、習得・定着の程度に応じて、段階的支援を行うことにより、中学以降の読み書き学習との円滑な接続を推測できる。また、中学 1 年生と 2 年生を対象として、

正書法を含む基礎的な英単語の綴り習得の段階的な支援を行うことにより、中学生の英単語綴り困難の軽減を推測できる。

4. 目的

ローマ字の習得や正書法を含む基礎的な英単語の綴り習得は、クラス全員における達成が望まれる。しかし達成を支援する上では、個別の支援も望まれる。このようなクラス全員の支援と個別の支援を段階的に実施する上で、RTI モデルに基づく支援が効果的であることを推測できる。RTI モデルに基づく支援では、読み書きスキル把握の方法と共に、支援手続きを具体的に明らかにすることが必要である。以上より、本研究では、クラス全員の読み書きスキル把握の方法、クラス全員の支援の手続きとその効果、個別の支援の手続きとその効果を、ローマ字の習得と正書法を含む基礎的な英単語の綴り習得に関して明らかにすることを目的とする。

検討 1

小学 5 年生と 6 年生を対象として、ローマ字習得レベルを把握し、その困難の背景要因を把握する基礎スキル評価手続きについて検討を行うことを目的とした。

方法

対象：政令指定都市の市立小学校 4 校の 5・6 年生、中学校 2 校の 2・3 年生を対象として、クラス全員の支援と個別の支援を行う。研究参加と発表の同意を含む研究倫理の手続きに関しては、尚絅学院大倫理委員会により承認を得た。

調査課題：基礎スキルテストは、ひらがなとカタカナの特殊音節表記の書きテスト、ひらがなの流暢な読みテスト、順唱記憶テスト、ローマ字書きテスト等から構成された。一斉実施によりテストを行った。

結果・考察

	ひらがな読み	順唱	昇順	ローマ字の書き
	13	6	6	9
	14	4	6	9
	6	3	5	9
	10	5	6	9
	9	6	6	0
	15	6	2	0
	6	3	4	0

図 1 基礎スキルテストの結果

図 1 は、基礎スキルテストの結果を示したものである。ローマ字の書き困難の者は、ひらがな読みや順唱・昇順記憶などの課題に弱さを示した。これより、基礎スキル評価を行うことで、困難の背景要因に即した個別の配慮が可能になることが確認された。

文献

銘苅実土(2018)東京学芸大学連合大学院博士論文 (KOIKE Toshihide, SASAKI Kentaro, NOUDA Subaru, MEKARU Mito)